

日本がん疫学研究会

厚生省「地域がん登録」研究班の 研究活動報告

花井 彩（現：地域がん登録全国協議会）
（前：大阪府立成人病センター調査部）

わが国の地域がん登録は、平成7年現在35の道府県市で行われるに至っていますが、登録精度及び資料活用はこれまでの、長年にわたる多大の努力にも拘らず、多数の登録が不十分なままに留まっています。とはいえ、うち10前後の府県市登録では、量的精度は国際水準に達してきています。これまで量的水準の改善に焦点をあててきたため、質的精度の向上は、やむをえず置き去りにしてきた面がありました。

平成5年から7年までの厚生省がん研究助成金による「地域がん登録の精度向上と活用」に関する研究班では、登録精度が一定水準に達し、その登録資料をもって疫学研究をなし得る能力を備えた、13府県市がん登録に参加をお願いし、「地域がん登録が収集する情報内容と登録作業の標準化をはかり、質的精度を向上させて、得られるがんの統計値の国際的な比較可能性を高めつつ、これを用いて行政、医療、疫学の諸分野における登録資料の活用を促進するための研究を実施する。」を、目的としました。

具体的には、藤本伊三郎先生、福間誠吾先生以下の諸先生方が、これまでも本研究班で進めてこられた1. がん統計の整備、2. がん対策の評価、に関する研究活動を発展させつつ、3. 質的精度の向上と登録作業の標準化に関する協同研究を新しく進め、一方で、4. 地域特性に基づく各個研究を各地で進めて戴くこと、となりました。

1. がん統計の整備

がん統計の整備に関する研究では、(1)各登録が毎年算定する罹患数を集め、一定基準を満たした登録の成績から、平成5-7年に、1989-1991年の、毎年の全国罹患数、率を推計しました。1991年には、全国のがん罹患数は40.3万人で、1975年の1.9倍になっていました。同じ登録の成績を基礎として1985-1989年の5年間の毎年の全国罹患数、率を再推計することによって、この間の年々の推移を見やすくした上で、1975-1984年の罹患の推移と比較しましたところ、変化の速度が、従来よりも最近に減少している部位が多い（肝、肺など）ことを観測しました。(2)上記のように、1975-1991年について、全国罹患率を、国際的基準を満たした精度で整備することが出来たので、初めてこれを使用して、回帰式を当てはめ、この期間中での推移の傾向が将来もそのまま継続するとの仮定の下で、2010年までの罹患数を推計しました。2000年でのがん罹患数は59.3万人に及ぶと推計されました。

2. がん対策の評価では、(1)早期受診の促進度、早期診断機能の普及度を計るため、また、生存率が測定されていない地域で、がん患者の予後を推測するために、山形、福井、愛知、大阪、兵庫、長崎の6府県登録室が協同し、1991年の罹患者について、初めて臨床進行度分布を調査しました。5.3万人のがん患者のデータが集められましたが、全がんでの進行度判明率は平均で76%、判明者での早期（限局）の患者の割合は44%、領域及び遠隔に浸潤または転移のあったものは、それぞれ32%、23%でした。(2)診断から5年目に個々のがん患者の予後を調査した5年相対生存率は、わが国では現在、山形、福井、大阪の3府県で算出されていますが、登録によって算定対象に差異があるため、これ

らの成績を直接比較することができず、生存率集計方法の標準化が急がれています。現在10年生存率は山形と大阪の2府県で算定していますが、5年以後10年までの相対生存率の低下をみますと、3%乃至1%（全がん男女合計）と小さいこと、しかし、前立腺、乳房、膀胱などでは、5年目以後に相対生存率が18%、9%、8%などと低下すること、が明らかにされました。(3)がん検診の偽陰性率の計測方式の確立の為の研究として、宮城、山形、福井、大阪、兵庫の5府県の胃がん検診受診者47.6万人と、各県がん登録ファイルとを記録照合し、次年以降の検診発見例に比し、検診と検診との間に一般医療機関で診断されるいわゆる中間例が、進行がんをより多く含み、致命率も高く、精度管理上重要な対象であること、中間例が初回検診発見例の20%近く存在すること、などが明らかになりました。

3. 地域がん登録の質的精度向上のための研究分野では、初年度に、以下の分野についての各登録の現状を調査し、質的精度の向上には、収集情報、及び諸作業方式の標準化が必要との結論を得、次の研究を実施しました。

(1) 多重がんでは、それぞれの腫瘍を罹患数に計上します。従って、罹患数の比較性を高めるに、多重がんの定義の標準化が必要となりますが、研究班では、IACR、IARCが協同作成した定義を採択しました。その上で、判定困難例（9登録の約8万人の罹患者中の161例）を収集し、判例集を作成しました。

(2) がんの進行度の分類では、米国SEER計画が使用する「がんの進展度」分類を大阪府がん登録でまとめた「臨床進行度4分類」が、わが国の地域がん登録で最も多く使用されています。ところが、臨床では、UICCのTNM分類、または学会、研究会の「癌取扱い規約」の分類が広く用いられています。そこで、これら3種の分類間の対応表を、26部位について作成し、その中で、「臨床進行度4分類」の定義の整理も行いました。

(3) 地域がん登録に対する届出は、わが国では篤志的に行われていますから、届出患者、

ならびに届出医師乃至医療機関の情報保護に関し、がん登録室は大きな責任を負うこと、を明確にしておく必要があります。保護すべき情報の種類、具体的な情報保護の方法を述べ、大切な資料を保護しつつこれを利用するに当たっての規約、考え方を示したガイドラインを作成し、行政部局、医事法専門家、疫学研究者の方々の意見を伺いつつ、一応完成させることができました。

(4) がん登録では、同一患者の医療情報が、複数の医療機関で発生しますが、重複登録を防ぐため、資料相互間の照合同定作業が重要な意義を持っています。詳細は省略しますが、その精度と効率を明らかにする試みが行われました。

(5) WHOが国際疾病分類(ICD)の第10回改訂を行いました。比較性を保つため、過去のデータの変換にあたっては、同じ定義の変換表を用いることが望まれます。米国NCIが発行した変換表を利用し、病情報をもつ登録、もたない登録、それぞれのための2種の変換表を作成しました。

(6) "Cancer Registration, Principles and Methods (1992年IARC刊行)" は、地域がん登録の国際的な標準方式を示した単行本で、国内登録の標準化を進める上で役立つものと思われ。本文を研究班で翻訳し、地域がん登録協議会に、図表の翻訳、監修と編集をお願いしました。なお、登録関係者にのみ無料配布する条件で、IARCから翻訳の許可を戴きました。

4. 登録資料の利用による地域特性を生かした疫学研究は、各地で実施されましたがここでは省略します。

3年と言う期間は、質的精度向上に関する研究についてはやや短かすぎ、なすべきことの半ばにもおよばなかった感のあることを否認しません。精度向上はいづれにせよ、研究された方法を普及させること、その結果を評価すること、まで進むべきものと考えますが、普及は研究ベースでできるものではなく、成果の評価に至るには、年月を要します。それ

とは別に、本研究班が残しました課題として、次のような項目をあげることとなります。

(1) 全国レベルのがん統計の整備をさらに進める場合、中央に個人情報収集し集計することが要求されるようになって行くと予測されますが、このための問題点を明らかにしておく必要があります。(2) 生存率の測定、計算方式の標準化が急がれます。(3) 一次予防の評価方式の開発、(4) 登録資料の量的ならびに質的精度管理方法の開発がなお残されています。(5) 1988年に研究班では「地域がん登録の手引き第3回改訂」を刊行していますが、その後のがん登録の発展の中で得られた研究成果他を取り入れて、第4回改訂版を作成することが必要です。(6) わが国の国としてのがん登録システムを構想する研究が必要です。

多くの課題を残しました研究班を、大島明先生が主任研究者として、平成8年度から進めて下さることになり、既に本年度の研究計画が進められています。がん疫学研究会の諸先生方の暖かい応援とご鞭撻をお願い申します。

International Conference on Food Factors: Chemistry and Cancer Prevention に参加して

石川秀樹 (大阪府立成人病センター研究所第10部)

平成7年12月10日～15日にかけて、浜松市のAct City Hamamatsuにおいて International Conference on Food Factors: Chemistry and Cancer Prevention 「食品因子の化学とがん予防」国際会議が、名古屋大学農学部教授、大澤俊彦先生を会長として開催されました。本会議は、デザイナーフーズ計画の一応の終了の年である1995年に、デザイナーフーズ計画のオーガナイザーの一人として参加されていた大澤先生を会長とし開催されたものです。デ

ザイナーフーズ計画は、1990年より5年間、2000万ドルの予算規模で米国立がん研究所を中心に始まったプロジェクトであり、その主な目的は「人間の健康の維持にどのような食品成分が機能を果たすのか」の科学的な解明です。その内容は、(1) 植物性食品中に存在するマーカーとなる成分の化学的分析と評価法の確立、(2) マーカーとなる化合物の臨床的な評価、(3) 発がん抑制因子の科学的な論理性、(4) 発がん抑制機構の解明、(5) 実際にがん予防機能を持った食品や飲料の開発、(6) マーカーとなる化合物や発がん抑制因子の含量を高め濃縮する製造法や調理法の開発、の6プロジェクトに分かれています。

このような計画を背景に開催された国際会議であったため、臨床栄養学、食品化学、薬理学、生化学、医学など多くの分野から研究者の参加がありました。特に、大澤先生は、デザイナーフーズ計画において、*in vitro*の系から最終的にはヒトを対象に、生理活性や機能性を評価する介入試験や臨床的研究の流れを構築する必然性を痛感され、介入試験を重要なテーマのひとつとされましたので、がん疫学の先生方も多数参加されていました。

会議は5日間にわたり開催され、13題の基調講演と16の分野で27のセッションのシンポジウム、ポスター発表と企業ブースからなり、1000人以上の研究者が参加したとても大きな国際会議でした。しかし、私は前半しか参加しなかった上に、ポスターを除く口演だけでも4会場に分かれて並列で開催されたため、会議全体の把握はまったくできておりません。従って、今回の会議報告は私の研究に関連する、がん疫学の一部だけになることをご了解ください。

基調講演では基礎研究から疫学研究まで幅広いお話がありました。疫学研究では、米国立がん研究所のGreenwald先生が、食品によるがん予防の研究について、大規模な介入試験の現状を報告されました。また、国立がんセンター研究所の渡辺昌先生が、本邦において肺がんや大腸がんの発生率は増加傾向に

あるものの、前立腺がんや乳がん、子宮がんなどホルモン関連の癌は、白人に比してそれほど高い発生率ではないことを示し、この原因として日本人が多く摂取する大豆中のイソフラボノイドがエストロゲン様作用などにより、発癌予防に関与している可能性を示されました。

私が参加しましたシンポジウム、Approaches to Cancer Prevention-3では、4人の演者が発表を行いました。本会議では最も臨床に近い発表であったと思われました。筑波大学泌尿器科の赤座先生が、乳酸菌による膀胱癌発生予防の研究を、動物実験による基礎的検討と、ヒトによる膀胱癌治療後の再発または異時性多発膀胱癌の予防のための無作為比較試験の成績を発表されました。乳酸菌に関しては、最終日にテクニカルセッションとしても発表があり、大変活発な議論があったとのことでした。発癌予防に関して乳酸菌はかなり注目を集めていたように思われました。岐阜大学第一内科の森脇先生が、微量栄養素としてカロテノイド、カテキン、脂肪酸による発癌予防を、主に培養細胞の系による研究成果から発表されました。予防物質を働きかける時の受けて側の細胞の状態に注目し、異型の弱いときと強いときで予防物質の作用に差があることを示されましたが、ヒトに応用するとき重要な所見と思われました。次に、私が現在行っています大腸癌発癌予防のための介入試験のプロトコルを紹介しました。まだ成績の出ていない方法の紹介のみであったにもかかわらず、発表終了後も、フロアで幾つもの質問を受け、外国での介入試験の注目度に改めて感心させられました。最後に、韓国の尹鐸求先生が、韓国での朝鮮人参に注目したコホート研究の成績を発表されました。演者は以前に症例対照研究の手法を用いて朝鮮人参の発癌予防効果を報告されています。その成績は驚異的な数字であり、朝鮮人参の摂取者は、全癌でORが0.50、胃がん、肺がん、肝がんなど、ほとんどすべてのがんで朝鮮人参が発癌を予防する可能性を示していました。今回の4533人の成人によるコホート研究でも、朝鮮人参は

幾つもの癌で発癌予防効果の可能性が示され、大変注目を集めていました。

大きな国際学会のごく一部しか報告できませんでしたが、この会議の内容はSpringer-Verlag社より2分冊として1997年3月に出版予定とのことでした。

特定の研究分野の研究者が集まる会議ではなく、「食品成分による発癌予防」という共通の目的を持った研究者の集まりである本会議は、目的が明確なため、きわめて機能的にまとめられていたように思いました。このような機能的な研究者集団ができたのを機会に、今後の国際的活動の母体となるJapanese Society for Food Factors（仮称）が設立され、本年の12月10日、11日の2日間、国立がんセンターにおいて第1回の研究会が開催される予定となっているそうです。

第19回日本がん疫学研究会 The 19th Meeting of the Japanese Society of Cancer Epidemiology テーマ：食生活関連がんの予防

日時：1996年8月26日(月) 9:00AM～
会場：名古屋国際会議場 第234会議室
〒456 名古屋市熱田区熱田西町1番1号
TEL:052-683-7711 FAX:052-683-7777
アクセス：地下鉄名城線「日比野」または「西高蔵」
下車 徒歩5分
JR 名古屋駅からタクシーで15分
会長：徳留 信寛
(名古屋市立大学医学部公衆衛生学教室、教授)

特別講演：M.Hakama (フィンランド)
「世界における無作為割付臨床試験」
座長：富永祐民(愛知県がんセンター)

教育講演：西野輔翼(京都府立医科大学)
「がんに対するケモプリベンションの展望」
座長：清水弘之(岐阜大学医学部)

一般講演：
M.A.Garces(グアテマラ)「食生活と胃がん」
座長：吉村健清(産業医科大学)
Y-O. Ahn (韓国)「食生活と肝がん」
座長：重松峻夫(福岡大学医学部)

- S-Z.Yu (中国)「食生活と肝がん」
座長：徳留信寛(名古屋市立大学医学部)
- I.Serra (チリ)「食生活と胆嚢がん」
座長：山本正治(新潟大学医学部)
- S.Cornain (インドネシア)「食生活と乳がん」
座長：大野良之(名古屋大学医学部)

パネルディスカッション：

食生活関連がんに対する無作為割付臨床試験

- 松村康弘(国立健康栄養研究所) 食生活介入の問題点
池田正人(産業医科大学) 統計学的側面
浜嶋信之(愛知県がんセンター)

インフォームドコンセント

- 中地 敬(埼玉県立がんセンター) EGCGとがん
石川秀樹(大阪府立成人病センター)

食物繊維と大腸がん

- 津金昌一郎(国立がんセンター) β -カロテンとがん
座長：渡辺 昌(東京農業大学)
大島 明(大阪府立成人病センター)

事務局：〒467 名古屋市瑞穂区瑞穂町川澄1
名古屋市立大学医学部公衆衛生学教室内
第19回日本がん疫学研究会 事務局
佐々木 敏
TEL: 052-853-8176
FAX: 052-842-3830
E-mail: tokudome@med.nagoya-cu.ac.jp
sasaki@med.nagoya-cu.ac.jp

研究会案内URL

<http://www.nagoya-cu.ac.jp/nagoya-cu/ncuwhat.html>

英語版URL

<http://www.nagoya-cu.ac.jp/nagoya-cu/encuwhat.html>

第7回日本疫学会総会のご案内

第7回日本疫学会学術総会

会長 稲葉 裕

時下ますますご清栄のこととお慶び申し上げます。

さて、第7回日本疫学会学術総会を下記の要領で開催いたします。多くの皆様のご参加と演題申し込みをお待ちいたします。

今回の総会では、メインテーマを「21世紀の疫学を目ざして」といたしました。疫学の将来を展望して、疫学の様々な課題について活発な討論を行う場になりたいと考えています。

なお、関連行事として開催しております日本疫学会(JEA)セミナーも今回で4回目を迎えることとなりました。今回は「臨床家のための疫学研究デザイン」を主題として開催します。こちらの方もふるってご参加くださいますようお願い申し上げます。

多くの皆様のご協力を得て、実りの多い総会にしたいと考えております。よろしくお力添えのほどお願い申し上げます。

記

1. 日程 平成9年1月23日(木)・24日(金)

2. 主な内容

主題：「21世紀の疫学を目ざして」

会長講演「疫学研究の過去・現在・未来

—Biological Agentsを中心に—

特別講演 Dr. Pasakorn Akarasewi

タイ チェンマイ結核センター所長(予定)

「アジアにおけるHIV合併結核の現状と対策」(仮題)

シンポジウム：従来のように演者を指定せず、演題の報告に基づいて討論を行う。

座長：未定

日本疫学会奨励賞受賞講演

ミニシンポジウム、一般口演、モニターによる報告

「疫学の未来を語る若手の集い」主催討論会

総会議事

関連行事・理事会・評議員会・各種委員会・懇親会

・第4回日本疫学会セミナー

3. 会場 北とびあ

〒114 東京都北区王子1-11-1

TEL:03(5390)1100

FAX:03(5390)1138

4. ミニシンポジウム

応募演題の多かった5つのテーマを選んで1テーマについて4~5名の演者に発表していただきます。(

1会場はスライド、4会場はOHP、各10枚程度)

ミニシンポのテーマの候補を示します。

「震災後の慢性影響」

「感染症サーベランス」

「循環器のサーベランス」

「感染症と癌」

「健診・スクリーニング」

「疫学統計」

「介入研究」

5. 一般演題の発表形式

すべて口演で行います。発表は一題につき、発表7分、討論3分、計10分を予定しています。(1会場

はスライド、4会場はOHP、各7枚程度)

6. 疫学の未来を語る若手の集い主催討論会

2つのテーマについて意見を数人の若手に発表してもらい総合討論する。

意見については、抄録と同じ形でまとめて、事務局宛にお送り下さい。

意見応募多数の場合は、司会者と事務局で選定させていただきます。

7. 学会抄録

A4版1ページとする。抄録によって、プログラム委員会がミニシンポジウムとするか、一般口演とするか等の振り分けを行う。

8. 会費

- (1) 総会参加費 (演題発表の有無にかかわらず)
 - 平成8年10月31日まで 6,000円
 - 以後当日まで 7,000円
- (2) 懇親会参加費 6,000円

参加ご希望の方は、はがきでお申し込み下さい。振り込み用紙に必要事項ご記入の上、お払い込みください。なお、疫学会会員番号は送付書類宛名ラベルの右下の数字です。抄録集は事前に配布いたします。なるべく事前に振り込みいただきますようお願いします。(値段が変わります。)

9. 演題申し込み

(1) 演題の発表をご希望される方は、はがきに演題名その他必要事項をご記入の上、ご返送ください。追って、口演抄録用の原稿用紙等をお送りいたします。

(2) 演題募集の締切:平成8年9月5日(木) 必着
抄録原稿の締切:平成8年10月11日(金) 必着

(3) 発表者は日本疫学会会員に限り、1人1演題とします。連名の方も原則として日本疫学会会員とします。ただし、「疫学の未来を語る若手の集い」での意見発表者との重複を妨げません。非会員で発表を希望される方は、以下に示す日本疫学会事務局で会員の登録を受け付けておりますので、ご連絡ください。

日本疫学会(JEA)事務局
自治医科大学公衆衛生学教室内
〒329-04 栃木県河内郡南河内町薬師寺3311-1
TEL: 0285(44)2111
FAX: 0285(44)7217

10. その他

第7回日本疫学会総会、第4回日本疫学会セミナーについてのお問い合わせ等は、以下に示す総会事務局へお願いします。

第7回日本疫学会総会事務局
順天堂大学医学部衛生学教室内
〒113 東京都文京区本郷2-1-1
TEL: 03(5802)1047
FAX: 03(3812)1026

東西

東西編集後記

深尾・渡辺の東西コンビで発行する最終のNEWS CASTをお届けします。これまでは、ほとんど深尾先生の主導のもとに行ってききましたが、今回ははじめて編集も京都で行ないました。まだ、あまり慣れておらず、庶務担当幹事の田島先生にも相当ご迷惑をおかけしました。この場をお借りしまして、御礼申し上げます。今号は平成5~7年度の厚生省「地域がん登録」研究班の班長を務めてこられました花井彩先生にその活動の概略についての報告を巻頭に執筆していただきました。また、少し古くなりましたが、昨年12月に浜松で開催されましたInternational Conference on Food factors: Chemistry and Cancer Preventionの参加報告記を石川秀樹先生に書いていただきました。会員の先生方とは、8月末の名古屋の第19回の

日本がん疫学研究会とそれに引き続いて開催されま
す、第14回国際疫学会学術総会でお会いできることを
楽しみにしております。

最後に、2年間に渡りNEWS CASTの東方編
集委員長をしていただきました深尾彰先生に篤く御礼
申し上げます。本当にご苦労様でした。

(京都府立医科大学公衆衛生学教室 渡辺能行)
田島先生と徳留先生のお誘いで気軽にお引受けした
本誌の編集委員の任期がやっと満了しました。期待さ
れたような活動ができなかったことを深くお詫びしま
す。今後は学会場で私と目が合っても大丈夫ですから
ご安心を。ついでながら、私事ですすが6月1日付で下
記に転出しました。これからもよろしくお願い致しま
す。

(山形大学医学部公衆衛生学教室 深尾 彰)

発行
日本がん疫学研究会

事務局 〒464 名古屋市千種区鹿子殿1-1
愛知県がんセンター研究所疫学部 気付
TEL: 052-762-6111(内線8852) FAX: 052-763-5233
振込口座 00810-2-37001

編集責任者
深尾 彰
渡辺 能行